

## 第2班 第三回研究会 報告書

日時：2005年8月28日(日) 14:00 ~ 17:00

会場：キャンパスプラザ京都 6F 龍谷大学サテライト教室

参加者：富野 暉一郎、阿部 圭宏、川村 喜芳、阪口 春彦、林田 久充、西田 俊之、山口 洋典、田村 瞳（敬称略）

議題：

- 1、公共政策系大学院派遣アンケート調査について（川村先生報告）
- 2、公共政策カリキュラムについて - 公共性のキーコンセプトについて
- 3、その他
  - ・教育・研修システム WG に関する情報交換
  - ・GP について（阪口先生報告）

配布資料：

- 1) 公共政策系大学院アンケート調査について（川村報告）
- 2) 公共政策系大学院派遣者アンケート（川村報告）
- 3) 北大公共政策大学院のカリキュラム（川村報告）
- 4) 川村 喜芳「町村職員の大学院派遣と研究活動支援 - 「地方分権」の時代を担う町村職員の能力開発 - 」、『自治フォーラム』1997年5月
- 5) 「特色ある大学教育支援プログラム」および「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」における地域連携に関する採択取組の概要（阪口報告）

内容：

まず、川村先生による（大学院に派遣された北海道職員を対象とした）公共政策系大学院アンケート調査及びその対象者とのヒアリング調査についての報告があった。内容は、レジュメ参照。今後は、この北海道の事例と英国のバーミンガム市での事例、そしてNPO側の事例（NPOのアンケート調査については富野先生が担当）を照らし合わせ、議論することが確認された。質疑応答は、以下のとおり。

### 質疑応答

富野

英国の事例と似ているという気がした。自治体職員が派遣されて大学院に行けるのは一握り。自治体職員が大学院で授業を受けるのはどのくらい意味があるのかという議論はいつももある。英国のバーミンガム市では、市と大学が一緒になって全体で協力して研修をする。これによって、実学+理論が提供できるというメリットがある。

阪口

有効でないと答える背景が大事ではないのか。有効でないのは、すでに習っているからか、

それとも現場で活かされないからか。

川村

現場で活かされないから。大学院で学んだことが現場であまり活かされていない。

阿部

大学院派遣に対して職員でどのように声が上がるのか。

川村

町村会では、本人が手を挙げて役場が出してくれないケースがあった。私が町村会にいた頃は一本釣りをしていた。道庁では、手上げが基本。

西田

(大学院への派遣に対して)同じ職員を抱える現場の理解はあったのか。

川村

町村では、あまり理解されていないようだ。町村会の大学院派遣事業は、今年度で廃止になった。道庁では、人事課が推進していることもあり、職場で理解されている。

林田

論文、思考方法ができれば、どこの部署でも働くことができる。大学院や研修に行った人々は政策法務に入りがち。現場で経験を活かすよりも、自分の興味や関心が大事のように思う。持っている知識と解決能力などを補完する能力を OJT が補うのが大事ではないのか。

富野

公務員養成には、NPO 養成が入っていない。ここを一緒に育てるふうに変えていかないと協働のカリキュラムが機能しない。

林田

NPO 等に参加しない限り、行政の優位性に気づかないということがあるのではないか。集合的に本当に研修を受けるのは、5年か10年に一度。管理職でも年に一度もしない。局長以上は、研修はない。

山口

研修と言わない研修をするほうがおもしろいのではないか。実態は、「相談センター」という形でいくほうがいいのでは。機会は均等、結果は不平等の是正を今度の熊本市での研修で行うと思う。

川村

実際、アンケート調査を行って、即戦力にはならなくても（大学院での影響が）どこかでジワーと効いているのだなと感じた。

阪口

効果測定は難しい。測定側が学生に求める効果が異なることもある。

以上

次に、公共政策カリキュラムについて - 公共性のキーコンセプトについて - を検討した。LORC の主要研究テーマの一つである地域人材の育成に関して、その第一ステップとして「公共性」について議論し、その後 プレーンストーミング方式を採用し、参加者全員による討論を行った。その結果、「公共性と公益のかかわり」に関する富野先生が作成した案をメーリングリストで流し、それをもとに意見交換をすることが合意され、今後ガバメントセクターと社会的セクターの関係について、そこで求められる人材を模索していくことが確認された。内容は以下のとおり。

「公共性」に関する議論

富野

公共性とは、行政第一主義ではない。でも、企業にいる人は？また、マスコミをどのように捉えるか。

西田

これまで2班の中で「公共領域」という言葉を使ってきた。従来どおり行政がまかなえなくなってきたということ。では、誰がそれを担うのか。公共の領域がかなり低くなってきた。

阿部

公共と言われる電気・ガス・水も元々は役所が担ってきた。それが市場化した。今でも「公共」を担っている意識があるのか。

川村

除雪、排雪、草刈などは、行政から地域の町内会に移ってきている。

富野

公共は個人でできないことをすべて指すのか。それでは、会社も入るのか。ここら辺の議論を深めなくてはいけない。また、公共は皆のためのものというが、皆とは何なのか。マ

阿部

公益という話でいくと、NPO だと不特定多数を指す。

阪口

公共かどうかを考えると、公共の取組を主体と客体に分けて考えていくべきではないのか。誰がどういう問題を扱うのか。社会に共通する問題なのか、社会的な原因による問題なのか。単純に分けることができないのでは。

林田

公共という言葉で文化がくくれるか。

西田

公共と市場エリアとは同じ面があるとは思わない。だからといって、公共の反対が市場といわれると疑問視する。

林田

地域の課題を解決するコミュニティビジネスと NPO 活動の違いは。

西田

公共と公益はどのように分けていくのか。小数であっても社会が必要なら公共ではないのか。

以上

### ブレインストーミング

( 参加者一人一人が、次のキーワード「知識 knowledge」「態度 attitude」「能力 skill」から連想されるものを簡単なコメントを入れて順番に出し合っていた )

#### 「知識 knowledge」

- ・ 財政 ( 金には限りがあることを知る )
- ・ 人間感 ( 人としての生き方の中で地域とどのようにかわるか )
- ・ 常識 ( 公共人材は公共が不可欠。協働の基盤としての常識がまず重要 )
- ・ 地域特性 ( 地域にはそれぞれ固有の魅力や限界、そして可能性がある。どういう歴史があるのか、流れをくんで欲しい )
- ・ 政策法務 ( 地域人材として NPO も自治体職員にも必要 )
- ・ 現状 ( 社会 etc. ) 分析 ( 今置かれている時代きちんと認識しておくことが必要 )
- ・ 一般教養 ( 協働する中では、まず話が通じることが大事 )
- ・ 地域の情報 ( 地域で働く、動かす最も基本的なベース )

「態度 attitude」

- ・人なつっこさ（いつの間にかまとまりや動きを作り出す態度）
- ・行動性（評論家ではダメ）
- ・愛嬌（お互いのことを思い受け入れる人柄）
- ・公正（誰のためなのかということにこだわる態度が重要）
- ・人のことを思いやる（相手の立場に立って思考・行動することが大切）
- ・市民を馬鹿にしない（生活者の視点に立つ）
- ・住民であること（公務員よして基本的な対応）
- ・人当たりのよい（協働でチームワークを組むにはまず一緒に仕事をしたいと思えるように）

「能力 skill」

- ・交渉力（協働のためには、パートナーに理解してもらうことが重要。そのためには、情報収集力、分析力、コミュニケーション力などが必要）
- ・説得力(一人ではできない)
- ・文献の引用
- ・分析力（公共なるものを支える一般性、客観性の源泉）
- ・コミュニケーション能力（いろいろなセクターをつなぐためには、対話が必要）
- ・プレゼンテーション能力（コミュニケーションの前提として、プレゼンテーション能力が必要）
- ・事務処理能力（物事の運営・展開をスムーズに動かしていくため）
- ・出会いの場をつくる力

以上

次に、熊本市での研修プログラム試行について、熊本市側の代表である西田氏から熊本市の受入に対する現状説明が行われた。熊本市の受け入れ体制及びプログラム内容については内部調整中で、次回の教育・研修システム WG で詳細を検討することが決定された。

最後に、阪口先生から GP に関する報告が行われた。配布資料参照。時間の都合上、次回に報告を再度していただくことで合意した。

以上